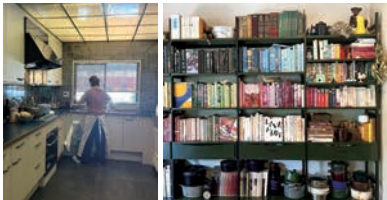


Topics 1 料理のプロに学ぶ

編集部
S.O.

おうちづくりのイメージをどのようにまとめていますか？私は今リフォームを検討中です。Instagramを見てこの家のここがいいな！あの家のここがいいな！と思うものの、うまく整理できず、意外と難しいなあと感じています。そこでいったん頭の中を整理しようと、一番気になっているキッチンから考えることに。キッチンは何よりも作業性が大事。働く母は一秒たりとも時間を無駄にたくりません。動線を最短にするには何をどこに配置したらよい?!常に視界に入るので見た目もこだわりたい!…と、キッチンの奥深さを感じています。そこで浮かんだのが、趣味を通う料理教室の先生のキッチン。料理



のプロはどうしているのだろう…とレッスン時に観察しました。

今回ご紹介するのはLIKE LIKE

KITCHENの小堀先生のご自宅兼アトリエ。チャーミングな先生とおいしい料理との出会いをいつも楽しみにしていますが、キッチンもとてもオシャレ。色別に並ぶ料理の本はまとまり感があり、それだけでアート。お鍋やせいろはスタッキング。お菓子の型は壁に掛けて。似た種類や色でまとめると見えていてもすっきり感があります。見せる・隠す部分のバランスが良いと、こなれ感のあるカッコよくて楽しさが感じられるキッチンになりそうです。こんな立派なキッチンにはできそうにありませんが、「使い勝手と見た目のバランス」の考え方はとても参考になりました。皆さんも、身近なプロの暮らしを参考におうちづくりを考えるのもよいかもかもしれません！



Topics 2 記憶の中の家

編集部
M.M.

私が小学校の高学年の頃、両親が二度目の家づくりを始め、土地探しの毎週末となっていました。ついに土地購入済となりましたが、設計期間中もその土地に足を運んでいました。神奈川県の実地では大きなイチョウの木と解体前の山小屋風の古い木造平屋が建っていました。小学生の私にとっては、そこを探検するような気持ちで家に入り込んで遊ぶ週末。水平垂直のグリッドにのったプランではなく、大きなリビングを中心にキッチンや個室が何部屋か角度を付けつつ配置されていた記憶。リビングは絨毯敷きで、床には段差があり、庭に向かって座ることができるようになっていたり、庭から入る陽ざしが勾配天井を伝って奥のキッチンまで届いていました。家のサッシは木製で、庭へはちょっとした段差で接続していたと思います。明るいうリビングとは一転、個室は山小屋の一室といった印象。

木々が見える窓と天井まで壁一面の木製収納扉で「籠り感」のある心地よい空間、私はその部屋を基地にしていました。一般的な家とは確実に違う何かを感じてはいましたが、そんな週末の素敵な家も、設計が進むうちに取り壊しとなり、新しい家へと気持ちが移っていきました。

後から両親にその山小屋風の家は建築家の宮脇檀(みやわきまゆみ)さんの設計であったことを聞かされました。その価値を小さかった私は知りませんでしたが、心地の良い空間だったことは確実に記憶として残っています。もしその時に宮脇檀さん設計の家だと私が認識していたら、解体が

News
letter建築家とつくる家
個性をカタチに、賢い家づくり。

2024.11

R+house 御殿場

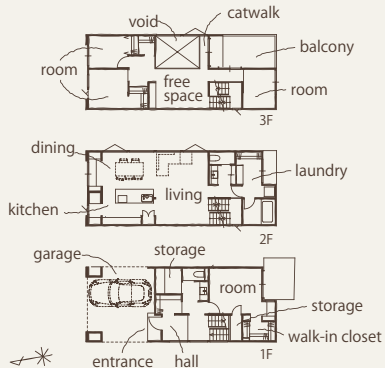


内と外の境界が曖昧な、四季を身近に感じられる家



市街地に建つ明るい3階建ての住まい

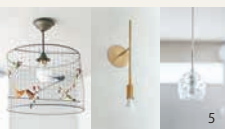
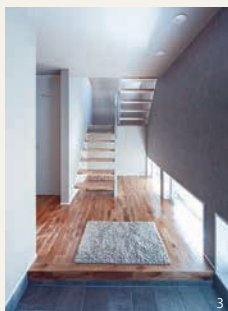
敷地は東京の都心部に位置し、南側隣地に6階建てのマンションが建つ条件の中で、家の中心部にまで光を導いた明るい3階建ての住まいです。2階に設けたリビングは隣家からの視線は遮りプライバシー性の高さを保ちつつ、空間の豊かさを得られるよう計画しました。「ご多忙なご夫婦がストレスなく3人のお子さまの子育てや家事ができる家」とするため、動線を工夫し、空間につながりを持たせながらも家族それぞれが思い思いにくつろげる多彩な居場所をもつ住まいです。



吹き抜けと3階のフリースペース、ルーバルコーナーが一体となった空間



ルーバルコーナーへとつながり、暮らしを外へと広げます



- 3階レベルの南の窓から吹き抜け越しに陽光を取り込んだ明るいリビングスペース。
- 吹き抜けと一体となったフリースペースは子どもたちの遊び場に。
- 1〜3階まで空間をつなぎ、光を落とす踊場のある階段。
- 構造体となる壁フレームを意匠的に浮き出させたファサード。
- センスが光るインテリアが随所に。
- 光が降り注ぐリビング。

建築家プロフィール

宮田 恵実 Miyata Emi

1974年 東京都生まれ
 1997年 日本女子大学住居学科卒業
 1999年 東京都立大学大学院都市科学研究所修士課程修了
 1999年〜 藤和不動産株式会社 (現三菱地所レジデンス株式会社) 勤務
 2001年〜 ネパールにてNGO活動
 2002年〜 泉亭建築研究所勤務
 2007年 一級建築士事務所MOO空間設計室設立
 趣味 旅行、美術館めぐり、街歩き、山歩き

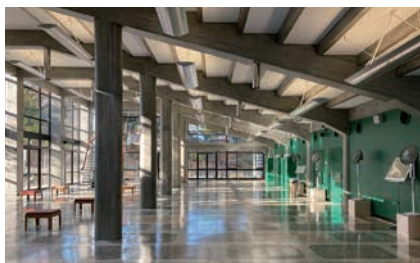


Architect Column

建築家 おススメ “ケンチク”

memo

Architect : 前川國男
 Location : 神奈川県横浜市



上: ガラス張りで街に開かれた軽快な外観。隣接する図書館も前川國男設計によるもの。
 下: 光と線に溶け込むホワイエ。天井の段々形状はホールの客席のかたちそのまま。

雑味なしのピュアなモダニズム建築 一大衆のための初の公立音楽堂

JR桜木町駅から徒歩10分ほど、文化施設が多く立ち並ぶ紅葉坂を上る道中にひととき透明感を放つ建物が神奈川県立音楽堂(1954年竣工)です。設計者は前川國男。ル・コルビュジエの弟子でもありとても有名な建築家です。戦後の材料難の時代、コンサートホールはラワンやラーチなどの簡素な材料で仕上げられているのですが、これがかえって空間をより上質なものにしています。戦後という大変な時期だからこそ大衆にとっての文化施設が必要という考えのもと、街に開かれたホワイエは不要なディテールや装飾を一切排除した極めてシンプルで深い空間構成。ガラス越しの掃部山公園の緑をバックに色気のある大階段がとても映えます。コンサートはもちろん定期的に建築見学ツアーも行われていますので、機会があればぜひ空間を体感してみてください。

織田 遼平 Oda Ryohei



織田建築設計室 / ODA DESIGN ATELIER
 趣味: 音楽、映画、落語

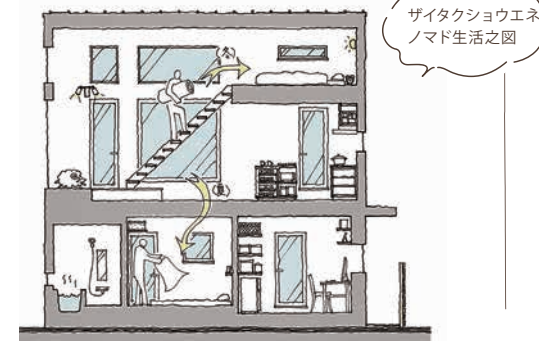
建築家 おススメ “ライフ”

ノマド生活

我が家はそこそこ高断熱高気密住宅で熱交換型全館換気なのですが、やはり自然の摂理に従って暖かい空気は上階に昇り、冷たい空気は下階に降りていってしまいます。もちろんエアコンで24時間空調をすればどの部屋も快適になるのは間違いないのですが、それじゃあ暑くない面白くない。ということで、我々一家は季節に従って野山を移住しながら生活するノマドを目指すのでした。季節が夏に差し掛かるとゲルの代わりにマットレスを担いで涼しい山麓(1階の寝室)に移住すれば、弱冷房でも快適に熱帯夜を乗り越えられます。紅葉の終わる頃には暖かい山頂(2階LDKのロフト)に移住して、霜の降りるような朝も無暖房なのにポカポカとした情眠を貪ることができるのです。もう気分

は遊牧民です。目を瞑ればそこは馬の背に揺られて一緒に移動するヤギや羊がやかましく「ヴェー」となっているのが聞こえてくるようです。ああ素晴らしいかな在宅省エネノマド生活! ヤギも羊もないし寝てばかりの遊牧民ですみません。

ノマド: 一定の居住地を持たずに移動しながら生活する民を意味する英語“nomad”が語源



相原 昭彦 Aihara Akihiko

相原昭彦建築設計事務所
 趣味: 読書、音楽鑑賞、オートバイ、フットサル、ランニング、食べること